「『銃と十字架』　遠藤周作」　2026年02月12日

宮田光雄先生を特別伝道集会の講師にお招きした時、私の出身地を聞かれたので「大分県です」と答えると、「それではペトロ岐部を知っているでしょう」と言われた。知らなかったので、そう答えると、先生は、同郷の信仰の偉人を知らない私を笑われた。母教会の杵築教会に帰郷した時、信徒の人が「ペトロ岐部記念館」に案内してくれた。国東半島の突端の国東市国見町にペトロ岐部の銅像と記念館があった。記念館に彼の生涯が展示され、その信仰のすさまじさを知り、自分の無知を恥じた。

岐部一族は、切支丹大名大友宗麟の影響を受け、切支丹に改宗した。後に「ペトロ岐部」と名乗った若い青年が長崎の神学校に行き、ラテン語でキリスト教と音楽を学ぶ。この時、ある神父は、日本人は能力が低く、卑しいので神父になることに反対した。ある神父は、日本人を誠実で勤勉であると評価し、神父になることを推奨した。ペトロ岐部は、前者の神学校に行ったため、「同宿」という、神父に仕えるだけの仕事に就いていた。日本の権力者たちは交易によって利益を上げることには触手を動かしたが、イエズス会の信仰を受けた切支丹大名たちは神社、仏閣を破壊する暴挙に走ったこと、また、他国では改宗に成功した後、その国を植民地化していることを知り、切支丹禁制へと転換したのである。切支丹迫害が激しくなり、彼は仲間と共にマカオに逃れた。その時、迫害に怯えている同信の者たちを見捨てたという慙愧の中で、神父になって帰国し、彼らを支えたいという思いを強くした。その思いは固く、ローマに行き、神父になることを決意する。インドのゴアに行き、そこから徒歩で、アラビア半島を隊商に案内されたのであろう、通り抜け、主イエスが福音を語り、十字架で殺されたエルサレムを、感激をもって味わう。そして、念願のローマに辿り着く。ローマで、神父になるために過酷な旅をした彼の熱意に動かされ、神父に叙階される。叙階を受け、迫害に苦しむ日本の切支丹を支えるために、帰国を決意し、マカオに向かう。アユタヤでしばしの猶予の時を持つが、帰国への願いは強く、長崎に上陸し、切支丹に比較的寛容と見られた仙台に向かう。彼の恐れは、過酷な拷問に堪えられるかであった。諸々の拷問があったが、中でも「穴吊し」が最も残酷であった。悪臭が立ち上る穴に、逆さに吊るされ、放置される。血が頭に溜まるので、耳の後ろに穴を開け、血を滴らせ、末期を長引かせる。度々引き揚げ、棄教を促す。棄教する者もあれば、天国行きを願って、4日間の苦しみを耐え、殉教する者もある。殉教する者の信仰には、ただ敬服する。皆に信頼されていたフェレイラ神父はこの拷問に耐えかね、棄教し、沢野忠庵という元死刑囚の名を与えられ、切支丹に棄教を説得する役を務めさせられた。彼の棄教は、拷問に耐えかねたことであったが、死者をこれ以上出したくないという思いもあったようだ。切支丹には失望を与えたことは確かである。ペトロ岐部は仙台で捕縛され、江戸でフェレイラと会う。棄教を説得されるが、敢然と拒否する。しかし、体力のある彼は穴吊りの長い苦痛に耐えられるかが、唯一の心配であった。予定通り、穴吊り刑が執行された。穴吊りで死ななかったので、火あぶりの拷問を受け、棄教を迫られたが「あなたに基督教は理解できぬ。だから何を言っても無駄なのだ」と言って、遂に死んだ。彼の信仰は、同信の仲間を支えることであった。そこにいかなる苦難があろうとも、主イエスが十字架の上で「わが事、なり終れり」と叫び、息をとったように、主イエスの苦難と死に重ね合わせることであった。その殉教には基督教は植民地政策のお先棒を担ぐ宗教ではなく、主イエスの生と死に倣う信仰であることが重要な証しであったと、遠藤氏は力説している。彼らの死闘によって、今の自由な信仰が保障されている。